

う意味はないことから言えることである。
注2 賀茂真淵「祝詞考」、本居宣長「祝詞後釈」、次田潤「祝

詞新講」、金子武雄「延喜式祝詞講」、以上を参考にし
た。

平安朝における「にほふ」について

金 沢 貴 代

目 次

第一章 序 論

第二章 本 論

一、平安朝以前における「にほふ」について

二、用例について

三、対象からみた「にほふ」について

(一) 視覚表現語・嗅覚表現語からの考察

(二) 「かをる」との関連性からの考察

(三) 視覚表現語・嗅覚表現語以外の表現語からの考察

第三章 結 論

補 註

第一章 序 論

「にほふ」(「にほひ」「にほひやかにり」なども含む)という

第二章 本 論

語は、奈良朝において宮廷関係・貴族階層の作歌に多く用いられ、感覚美の表現語として存在し、平安朝に入り、同じ感覚美の表現語としても、より広がりをもって生きているように感じられる。
これらの語が視覚・嗅覚などの感覚美に使用されていたということとは、広く中古の文学に興味をもつ人々の既に知るところである。
又、この語について、諸々の研究があり、当大学においても、二冊ほどある。たゞこれらは作品数、用例数などの点で狭義にわたっている感がある。そこで私は用例を広く平安朝作品二十一に求めて、当時における「にほふ」とは具体的にどういうものであったか、人々の感覚美にまで達したと思う。平安朝人の美意識の究明までは困難であろうが、せめて「にほふ」の時代的変遷なりとも究明できたら幸いと思う。

一、平安朝以前における「にほふ」について

平安朝における「にほふ」について論じていく前に、まず平安朝以前の「にほふ」は、一体どのようなものであったか、当時の「にほふ」の意識について述べておかねばなるまい。

万葉^{註1}で「にほふ」という言葉は、後世視覚を表すのと異なり、視覚に関して使用し、眼に美麗に見える物を指した。——この事は、万葉に興味を持つ人の広く知るところである。だが、それが時によると「衣ニホハセ旅のしるしに」の如く、色を染めるという意義になる場合のある事も、人のよく知るところである。と森本治吉博士は述べ、又沢瀉久孝博士は『万葉佳品抄』において、「にほふ」は古今集における「にほふ」とは違つて色をさしたものである。吉沢義則博士は、奈良時代^{註2}には「にほひ」に対しての興味に深くなかつたようである。と前おきして、万葉時代には視覚をあらわす言葉であつた。つまり目に写り来る「美感」を表わずに用いられた言葉と見て、語源についても『大言海』の説等を挙げ、論じておられる。

ここでは、語源まで遡つて云々することは省こうと思つたので博士の説も割愛する。時代が下つて、三木幸信氏は、先人の説——「にほふ」の本義は視覚表現である——を認め、さらに「かをる」との比較を試み、視覚表現から嗅覚美を表わす転義がみうけられることを指摘し、犬塚旦氏も先人の説を挙げ、三木氏の論を支持し、^{註4}「にほふ」は本来は視覚表現であつたものが、後に嗅覚表現に用いられるようになったと示唆し、柴生田稔氏も「にほふ」はもと色の感覚から出発し、その発散・動揺し移行する性質から次第に香の感覚を含むようになったものと思われ。と「かをる」と關係づけて述べておられる。

私が調査した限りにおいて今日に至るまで以上のような「にほ

ふ」に関しての諸論考がある。これらから、私は視覚表現から嗅覚表現への転義現象が見うけられるとしても、平安朝以前における「にほふ」の感覚の実質はやはり視覚的表現であつたと解したい。

ここで柴生田・三木両氏が「にほふ」を「かをる」と関連させながら論述しておられ、「かをる」との関連性を後にとりあげるの基礎だ管見であるが「にほふ」と同様に述べておく。

「かをる」の語は、すでに天武天皇代に見えているが、その意味するところは、潮気・霧等に関したもので、香のことではない。やはり「かをる」もこの当時までは、視覚表現語としての傾向が強いといえよう。ただ三木氏は、「薰」が薰猶の薰であることも嗅覚表現に関連させてもよさそうに思えるのである云々。と嗅覚表現語という見方をしておられるので一概に視覚表現語と断定はできないが本義は「にほふ」と同様であつたと見たい。

二、用例について

平安朝における「にほふ」について、二十一作品を通して、具体的用例数をあげて検討していくことにする。ここでは品詞別からの考察に重点をおいたわけではないので「にほふ」を大別して名詞・動詞・形容動詞と三つに分類した。尚、「かをる」についても同様である。

ここで表一をもととして私なりにまとめておくことにする。

- ① 「にほふ」は、中期になると『枕草子』15%、『源氏物語』13%、『浜松中納言物語』21%と使用度が高くなり、後期には前期と同じくらいに使用度が低くなっている。

- ② 「にほふ」の方が「かをる」よりもはるかに使用度が高い。

少なくとも以上二つのことがわかる。

①から「にほふ」の王朝語的性格をうかがうことができまいか。この頃から貴族社会において薰物趣味が流行したといわれている。これらとの関連性も否めまい。

次に①から考えられることは、「にほふ」の方が「かをる」よりも幅広い意味をもって使用されたのではないか。つまり、固定化された意味をもつ語でなく、あらゆる場合に使用されるといような自由性をもつ語ではなかったらうか。

表一において以上の仮定・方向を見いだしたわけであるが、もう少し詳細に「にほふ」を検討するために、表二、表三の作業を行って見た。

<表1>

	作品名		紛用例数		ニホヒ	ニホフ	ニホヒヤカナリ		カヨリ	カヨル	カウバシサ	備考
前期	①竹取物語		0									
	②伊勢物語	5%	4	4/5%	1	3	0	0/0	0	0	0	
	③土佐日記	3%	1	1/3%	0	1	0	0/0%	0	0	0	
	④大和物語	3%	5	3/2%	0	3	0	2/1%	0	0	2	
	⑤平中物語		0									
	⑥宇津保物語	6%	55	37/4%	10	22	5	18/2%	2	0	16	
	⑦蜻蛉日記	1%	3	3/1%	0	3	0	0/0%	0	0	0	
	⑧落窪物語	5%	10	5/2.5%	0	5	0	5/2.5%	0	0	5	にほはし(1)
中期	⑨枕草子	15%	13	11/13%	7	3	1	2/2%	0	1	1	にほはし(1)
	⑩和泉式部日記	2%	1	0/0%	0	0	0	1/2%	0	1	0	

中 期	⑭紫式部日記	8%	5	5/8%	3	1	1	0/0%	0	0	0	
	⑮源氏物語	13%	267	204/10%	110	80	14	63/3%	20	17	26	
	⑯栄花物語	12%	102	81/10%	47	29	5	21/2%	12	7	2	にはほし(8)
	⑰狭衣物語	11%	49	38/9%	27	11	0	11/2%	2	6	3	
	⑱篁物語	3%	1	%	1	0	0	0/0%	0	0	0	
	⑲提中納言物語	12%	7	7/12%	3	3	1	0/0%	0	0	0	
	⑳夜の寝覚	17%	59	51/14%	33	14	4	8/3%	3	5	0	にはほし(8)
	㉑浜中納言物語	21%	59	44/16%	27	12	5	15/5%	4	9	2	にはほし(1)
後 期	⑲更級日記	7%	4	2/3.5%	1	1	0	2/3.5%	0	1	1	
	㉒大鏡	1%	2	2/1%	1	1	0	0/0	0	0	0	
	㉓今昔物語集	4%	77	24/1%	12	12	0	53/3%	0	1	52	にはほし(1)

<表二> 「にはほふ」の対象について

作品名	総用例数	視覚的表現			嗅覚的表現			不明	嗅表 類以外
①竹取物語	0								
②伊勢物語	4	4	白菊(2)	桜花(2)	0			0	0
③土佐日記	1	0			1	梅の花(1)		0	0
④大和物語	3	2	藤袴(1)	山桜(1)	1	梅の花(1)		0	0
⑤平中物語	0								
⑥宇津保物語	37	15	花(4) 藤の花(3) 男(2) 女(3) 童(1)	桜花(1) 枝(1)	17	花(3) 紅梅(1) 梅の花笠(1) 女郎花(1) 薫物の香(2)	梅花(2) 白菊(1) 菊の花(1) 香(4) 楼(1)	5	0
⑦蜻蛉日記	3	1	桜襲(1)		1	初花(1)		1	0
⑧落窪物語	5	3	桜花(1)	女(2)	2	たき物(1) 香(1)		0	0
⑨枕草子	11	9	花(1) 男(2) 衣・装束(2) みちのくに紙(1)	花びら(1) 女(1) 蘇芳(1)	2	火とりの香(1) 香の紙(1)		0	0
⑩和泉式部日記	0								
⑪紫式部日記	5	5	男(1) 言葉(1) 雰囲気(1)	女(1) 色(1)	0			0	0

⑫源氏物語	204	98	男 ⁽⁹⁾ ・女 ⁽⁴⁾ ・花 ⁽⁷⁾ 紅花 ⁽¹⁾ ・梅 ⁽²⁾ ・藤 ⁽¹⁾ なでしこ ⁽¹⁾ ・山桜 ⁽¹⁾ 桜 ⁽¹⁾ ・柳 ⁽¹⁾ ・山吹 ⁽³⁾ 綿花 ⁽¹⁾ ・綿 ⁽²⁾ 表着衣 ⁽²⁾ ・蘇芳襲 ⁽¹⁾ 絵 ⁽¹⁾ ・花松の覆 ⁽¹⁾	81	男 ⁽⁸⁾ ・女 ⁽²⁾ 花 ⁽³⁾ ・藤 ⁽¹⁾ ・梅 ⁽⁴⁾ 紅梅 ⁽²⁾ ・橘 ⁽¹⁾ 紫苑 ⁽¹⁾ ・香 ⁽¹⁾ 名香 ⁽³⁾ ・薫衣香 ⁽²⁾ 移り香 ⁽¹⁾ ・香氣 ⁽¹⁾ 薫物 ⁽³⁾ ・衣 ⁽¹⁾ 直衣 ⁽¹⁾ ・袖 ⁽²⁾ 唐の紙 ⁽¹⁾ ・紙 ⁽¹⁾ 陸奥紙 ⁽¹⁾ ・草蓆 ⁽¹⁾ 風 ⁽¹⁾ ・御殿のあたり ⁽¹⁾ 御簾の中 ⁽¹⁾	12	13
⑬栄花物語	81	56	春の花 ⁽¹⁾ ・花 ⁽²⁾ ・桜 ⁽³⁾ 藤の花 ⁽¹⁾ ・白菊 ⁽³⁾ 菊 ⁽¹⁾ ・秋草の花 ⁽¹⁾ 春の花・秋の紅葉 ⁽¹⁾ ・ 人 ⁽¹⁾ 男 ⁽¹⁾ ・女 ⁽⁸⁾ ・肌色 ⁽¹⁾ 几帳の帷 ⁽¹⁾ ・車 ⁽¹⁾ 瑠璃の壺 ⁽¹⁾ ・村雲 ⁽¹⁾ 蘇芳 ⁽²⁾ ・衣・衣装 ⁽⁵⁾ 梅の桂 ⁽²⁾ ・紅梅の桂 ⁽²⁾ 桜の桂 ⁽¹⁾ ・藤の桂 ⁽¹⁾ 山吹の襲 ⁽¹⁾ ・紅梅の襲 ⁽¹⁾ 桜の襲 ⁽¹⁾ ・襲 ⁽²⁾	10	花 ⁽²⁾ ・梅 ⁽²⁾ 桜 ⁽¹⁾ ・戒香 ⁽¹⁾ 花の香 ⁽¹⁾ ・香 ⁽¹⁾ 男 ⁽¹⁾ ・女 ⁽¹⁾	13	2
⑭狭衣物語	38	20	花 ⁽¹⁾ ・桜 ⁽⁴⁾ ・八重桜 ⁽¹⁾ われもかう ⁽¹⁾ ・男 ⁽⁴⁾ ・ 女 ⁽²⁾ 男のつらつき ⁽²⁾ ・女の 顔 ⁽¹⁾ 人 ⁽¹⁾ ・織物の花 ⁽³⁾	14	男 ⁽⁸⁾ ・女 ⁽²⁾ 御子 ⁽¹⁾ ・女の衣 ⁽¹⁾ 部屋 ⁽¹⁾ ・神殿うち ⁽¹⁾	4	0
⑮篋物語	1	0	.	1	花橘 ⁽¹⁾	0	0
⑯提中納言物語	7	3	花 ⁽¹⁾ ・女郎花 ⁽¹⁾ ・男 ⁽¹⁾	2	花橘 ⁽¹⁾ ・衣 ⁽¹⁾	2	0
⑰夜の寝覚	51	37	花 ⁽¹⁾ ・桜 ⁽¹⁾ ・なでしこ ⁽¹⁾ 男 ⁽⁹⁾ ・女 ⁽²⁾ 女の顔・つらつき ⁽³⁾ 小桂 ⁽¹⁾ ・あたり ⁽¹⁾	11	男 ⁽²⁾ ・女 ⁽¹⁾ ・衣 ⁽²⁾ 直衣の指貫 ⁽¹⁾ たきもの ⁽³⁾ ・移り香 ⁽¹⁾ 風 ⁽¹⁾	1	2
⑱浜松中納言物語	44	28	花 ⁽⁶⁾ ・男 ⁽⁴⁾ ・女 ⁽⁷⁾ 装束 ⁽¹⁾	12	花 ⁽¹⁾ ・たち花 ⁽¹⁾ 女 ⁽¹⁾ ・香 ⁽¹⁾ ・薫香 ⁽¹⁾ たきもの香 ⁽²⁾ 名香 ⁽¹⁾ ・女の袖の香 ⁽²⁾ 衣にたきしめた香 ⁽²⁾	2	2
⑲更級日記	2	0		1	風 ⁽¹⁾	0	1
⑳大鏡	2	1	墨 ⁽¹⁾	1	梅花 ⁽¹⁾	0	0
㉑今昔物語集	24	4		18	花 ⁽²⁾ ・女 ⁽¹⁾ ・香 ⁽⁸⁾ 薫 ⁽¹⁾ ・空薫物の香 ⁽²⁾ 酒の香 ⁽¹⁾ ・糸 ⁽¹⁾ 不明 ⁽²⁾	1	1

<表三>

「かゝる」の対象について

作品名	紛用 例数		視 覚 表 現		嗅 覚 表 現	不明	視・嗅 覚以外
①竹取物語	0						
②伊勢物語	0						
③土佐日記	0						
④大和物語	2	0		2	扇の香(1)・紙(1)	0	0
⑤平中物語	0						
⑥宇津保物語	18	2	榊葉(1)・蓑衣(1)	12	織物(1)衣(1)・香(7) 薫物(1)・棧(1)・薫(1)	3	1
⑦蜻蛉日記	0						
⑧落窪物語	5	0		5	香(1)・衣(1)・沈香(1)・ 笛(1) たきもの(1)	0	0
⑨枕草子	2	0		1	衣(1)	1	0
⑩和泉式部日記	1	0		1	香(1)	0	0
⑪紫式部日記	0						
⑫源氏物語	63	8	男(5)・女(3)	54	紅梅(1)・藤(1)・藤袴(1) 花橘・橘・(5)・榴(1)・ 男(9) 女(1)・男の袖の 匂い(1) 女の移り香(1)・衣(1)・ 皮衣(1) 香(7)・薫衣香(1)・薫物 (4) えびの香(1)・名香(2) 香紙・紙(3)・みちのく に紙(1) 風(1)・不明(1)	1	0
⑬栄花物語	21	0		18	梅(1)・菖蒲(1)・空薫物 (1) 名香(1)・戒香(1)香(3) 薫衣香(1)・梅檀・沈水 の香(1) 衣(4)・男(1)・女(2)・不 明(2)	3	0
⑭狭衣物語	11	1	女(1)	10	仏(1)・女(1)・童(1) 香(2)・移り香(2)・名香 (1) 不明(2)	0	0
⑮簞物語	0						
⑯提中納言物語	0						
⑰夜の寝覚	8	4	女(4)	4	男(2)・女房(1)衣(1)	0	0

⑱ 浜松中納言物語語	15	3	男(1)・女(2)	10	女(2)・たきしめた香・香(2) 薫香(1)・衣の香(2) そらたき物(1)・御簾の うち(1) 不明(1)	2	0
⑲ 更級日記	2	0		2	物(1) 花橘(1)	0	0
⑳ 大鏡	0						
㉑ 今昔物語集	53	0		50	女(2)・息(2)・香(6) 空薫の香(4)・香薬(1) 棺ノ内(1)・房(1) 陸奥国紙(8)・紙(1) 膳(1) 不明(8)	3	0

三、対象からみた「にほふ」について

(一) 視覚表現語・嗅覚表現語からの考察

表二でわかるように、視覚表現語は287例、嗅覚表現語は174例と視覚表現語は嗅覚表現語の約1.6倍である。その対象は、植物71例、人物161例、衣・衣装28例。その他27例である。一方嗅覚表現語の内訳は植物36例、人物42例、衣19例、空薫物・香59例、その他18例である。

まず、視覚表現から具体例をあげて述べていきたい。

植物の場合は、櫻15（山櫻・八重櫻も含む）、藤5、梅2、白菊・藤袴・なでしこ・われもこうや単に花と表二の通りである。又

① 桜花飽かぬ匂を春霞立ちながらのみ見てや帰らん

のように、情景の美しさとしてとらえたものが多い。ここで、私は平安朝人の植物美への独自の観念のようなものをみる気がする。人物については

② さまことにほひみじきものから、君の御顔もうつしたるやうなり

のごとく、男・女の顔つき・様子などに美しさ・華やかさが見られると使っている。男女に分類してみたが、二十一作品を通して、その作品の主人公が男性か女性かで作中の「にほふ」の使用度が男に多いか女に多いかと変わってき、男女何れに多く使用された語か、一概にここで決めることは困難である。ただ作品中の主人公、又それをとりまく人々（準主人公的な人々）等の主要人物に多く用いられているということはいえるだろう。

「匂ひやかなり」は、すべて視覚表現であり、『宇津保物語』

5、『源氏物語』14中13、『栄花物語』5、『夜の寝覚』4、『浜松中納言物語』5、これらすべて人物に対する美に使用されている。

次に衣、衣装の場合であるが、

① 蘇芳の濃く薄き匂などに、草の香の御衣など奉る

と、20例中18余例は、襲の色目について使用されている。又、

② 枕御返し、紅梅の薄様に書かせ給ふが、御衣のおなじ色にはほひ通ひたる

この例文はその紙の色がお召物の同じ色に映り合っている」と解釈されるのだが、ここにおける「にほひ」は他の物にまでもその効果が移り、影響していることを表わしている。このことから「にほふ」が何らかの自由な動きをもった語ではなかったらうかと思ふのである。

万葉時代における「にほふ」に色を染める意があるが、色彩的に見るとどうであるかという論じられているが、ここでも少し例をとりあげて論じてみたい。

③ 伊紅にほふはいづら白雪の枝もとを、に降るかとも見ゆ

④ 伊紅にほふかうへの白菊はおりける人の袖かとも見ゆ

⑤ 枕みちのくに紙の畳紙のほそやかなるが、花かくれなぬか、すこ

しにほひたるも几帳のもとにちりぼひたり。

⑥ 紫いとふくらけさ過ぎて肥えたる人の色いと白くにほひて、顔そいとこまかによしばめる。

⑦ 寝殿のを見れば御簾いと青やかなるに杉木型の青紫に匂へるよ

り

⑧ 狭風に吹く赤められたるつらつきの匂は

夜くるしげなる面つき、いとあかくにほひて

涙くれなるにほひわたりて

⑨ 今紅ノ顔有シ匂ニ非ズ

⑩ 今鼻鮮ニテ匂ヒ赤シ

と色彩がはっきりしている例は12例ほどある。その中で紅色・赤色が8例その他に青紫・白・はなだ色（薄い藍色）の例が各一例ずつあるが、私は、紅色・赤色に使用したと考える。ただ、襲の色目などに使う場合は、山吹・藤（薄紫色）、桜となり、又別の観点が必要である。

次に嗅覚表現においては対象からみても、視覚表現ほど広範囲に渡っていないことがわかる。やはりこの辺りに、本義は視覚表現であったものが、嗅覚表現にも使用されてきたという二次的な感がありはしないだろうか。一番多い例が香である。これは空薫物のことであり、平安朝人の香への趣味の一端がうかがえる。又衣・衣装の場合も、直接的には衣・衣装であつても

⑪ 夜なべてならぬ匂ひばかりは御衣にいとふかくうつりにける

のように、衣にたきしめた香のことをさしており、対象が人物の場合も、その人の移り香のことであり、やはり香と関連している。そこで、嗅覚表現の174例中100余例は香・空薫物をさしているといつてもよいのではあるまいか。では、視覚表現から嗅覚表現への移行時日は何時頃といえるか。判然とこれを示すことは難しいが私は、平

安朝中期頃ではないかと思う。一般庶民でなく文学の荷手であったと考えられる王朝人は、平安朝に入ってから香氣に対して興味をもちだした。特に、

さらに、いづれともなき中に、さい院の御黒方、さはいへど、心にくく、しづかなる匂ひ、殊なり。侍従は、おとゞのをぞ、「すぐれて、なまめかしく、なつかしき香なり」(源・梅枝)

と薫物競べの描写がみられることから、「源氏物語」の頃にはすでに、人々の香への趣味が確立していたといえる。これらの趣味三昧とともに、「にほふ」の語も視覚表現から嗅覚表現へと幅をもった解釈をされるようになったのではなからうか。たゞ、古代から依然として嗅覚表現語の代表として「かうばし」「かぐはし」などを使ひ方、意味あいなどは多分に相違はあるうが、この時代も使用されている。では次に、「かうばし」「かぐはし」属である「かざる」との関連性について考えてみよう。

(一)、「かざる」との関連性からの考察

まず対象を分類した表二・三を比較してみると、視覚・嗅覚両表現において「かざる」は「にほふ」に比べて整然としている。特に視覚表現としての対象は18例中16例が人物とほとんど人物に対して使用されている。「にほふ」の場合と異なり、その人物全体が美しいというのではなく、その人物の一部である髪、顔つき、それも女性に対して使用されている場合が多い。その美も、特に「つややか」「上品な」「花やかな」という言葉で形容されるようなものであったと思われる。

嗅覚表現の方も視覚表現ほど用例数は多くないが、178例中香・空

薫物83例、紙9、衣21、人物25、植物12などである。紙・衣・人物の場合「にほふ」と同様に間接的には香・空薫物のことと考えられる。他に植物、風、その他不明などで、「にほふ」の対象ほど広範囲に渡っておらずきわめて狭い。又この時代に至って「かざる」は視覚表現語としてよりもより嗅覚表現語としての使用度が高いといえる。これは「にほふ」とは逆の傾向である。「かざる」においては、平安朝末期にはほとんど視覚表現は見られない。これらから、「かざる」は、平安中期を経、末期に達した時には既に嗅覚表現語として一般に認識されていたといつてよからう。又、

●**狭** 鬼は臭うこそあなれ。仏の御薫りにあらんのように、対象が仏である例は「にほふ」の対象にはない特異的な例である。これは両語の価値観に関する問題であらう。尚

●**落** 君は、万に物の香臭くにほひたるがわびしければいとあさましきには、涙もいでやみにけり

●**源** よべのは焼け通りて、うとましげに焦がれたる匂ひなど異様なり。(真木柱)

●**源** 月頃風病重きに堪えかねて、極熱の草薬を服して、……しはし、休らふべきに、はた侍らねばげにその匂ひさへ、花やかにたち添へるもすべなく、逃げめをつかひて”(帯木)

の例のように物の香の臭いにおい、衣の焦げた時のおいや草薬を服用したためのおいなどに使用されている。少なくともこの場合は快い香のおいなどと異なり、いやな嗅覚である。管見においては以上3例しかみあたらないがこれらからみても「かざる」は「にほふ」とちがい単に上品なみやびやかな美意識にかざられて用いられているということがいえよう。ここに又「にほふ」の語が自主性

を滞びた、多角性をもつ語とみる所以がある。

(三) 視覚表現語・嗅覚表現語以外の表現語からの考察

これまで、「にほふ」をそれぞれ視覚表現語、嗅覚表現語という観点から分類、考察してきたがそれらにどうしても分類できないものが表われてきた。

- (1) こまやかにおぼしおきてたるに、匂ひ出でて、宮の内、やうく人目見え、木草の葉も、たゞ凄くあはれに、(源 蓬生 P159)
- (2) 世に、心にくめでたき事に、思ひかしづかれ給へる御宿世をぞ、わが家までは匂ひこねど、面目におぼすに、(源 乙女 P321)
- (3) 口惜しく、御心うごきて、まづ、とぶらひ聞え給ふ。「いままむ」とだに、匂はし給はざりけるつらさを浅からずきこえ給ふ。(源 若菜下 P401)
- (4) 故入道宮の御手は、いと気色ふかく、なまめいたる筋はありしかど、弱き所つきて、にほひぞ少なかりし。(源 梅枝 P170)
- (5) 「人ひとりを、思ひかしづき給はむ故は、ほとりまでも匂ふ例こそあれ」と、心えざりしを、(源 真木柱 P137)
- (6) まほにはあらねど、うち匂はしおきて、いで給ふ。(源 横笛 P63)
- (7) 故権大納言、何のをりくにも、亡きにつけて、いとゞ惚はるゝこと多く、おほやけ・わたくし、物の折ふしの匂うせたる心地こそすれ。(源 鈴虫 P85)

(8) まづ、その折、かのをり、かどくしう、らうくじう、匂ひ多かりし心ざま・もてなし・言の葉のみ、思ひ続けられ給ふに、

(源 幻 P203)

(9) 人となりゆく齡にそへて、官・位、世の中の匂も、何ともおぼ

えずなん。(源 椎本 P362)

(10) 君たち、なま煩はしく聞き給へど、「うつろふかた、異に、にほはしおきてしかば」と、ひめ宮、おぼす。(源 総角 P413)

(11) さるは、此君しもぞ、らうくじく、かどあるかたの匂は、まさり給へる。(源 総角 P421)

(12) なつかしく匂ある心ざまぞ、おとり給へりける」と、事に触れておぼゆ。(源 総角 P465)

(13) 御返し、宮、藤の花神さびにけるみなもとに匂おれる末ぞ折りうき唐の紙に、いと今めかしくおかしくかゝせ給へりければ、

(米下 P370)

(14) 権大納言も、故殿の御世に、わがまゝににほひいで給しかば、(夜 P313)

(15) 親兄弟のあたりの草木まで、匂ひをちらしたりつれば(夜 P329)

(16) 聖のかたも、あまりものさはがしきまでににほひみちて、(夜 P275)

(17) この御身には何のにほひもなく、いとゞ大貳さへうせにしか

ば、
(浜) P280

(19) いとあはれに、何のにほひのあるにかと涙ぐましよう聞ゆ。

(更) P572

(19) 夜ニ至ルマデ蝸キ匂ヲ目出テ、内ニ入ル事ヲセズ。(今) P266

そこで「にほふ」自身の語義の面から考えてみたい。まず辞書・辞類を使って「にほひ」「にほふ」について考えていくと次表のよ
うにまとめられる。

に	ほ	ふ	に	ほ	ひ
ほのめかす。	勢力が強くなって周囲にあふれる。 盛んになる。 気配が立つ。(ほのぼの。ほんのり)	影響が及ぶ。	色・香	おもむき(風情)。気韻。気品。	ひかり。威光
(5) (6) (10)	(16) (1) (14)	(2) (3)	(19)	(4) (7) (8) (12) (17) (11)	(9) (15) ----- (13) (18)

これでわかることは、すべてのものが嗅・視表現の何れかに分類できると考えていたが、分類できないものが存在するというところである。ではこの視・嗅表現以外の義をもつ語はいつ頃から現われてきたのか。又どういう理由によるのか考えてみたい。

作品中「源氏物語」に現われたのが一番古いことから、平安中期頃からの現象とみてよからう。それも『今昔物語集』は異なるが、

『栄花物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『更級日記』と貴族文学に関連している点から貴族文化との関連性が否めないだろう。

そこで、私は平安中期が、視覚表現・嗅覚表現以外の表現を生み、今までの表現により広がりを加えた一転期と考える。そして『今昔物語集』に視覚表現、嗅覚表現の合流と考えられる「色香・艶香」の意があることから平安後期に至って、視・嗅両表現の合流された表現が生まれ、「にほふ」のもう一段階の転期があり、平安朝において二転していると考えられる。

変遷上からは以上であるが、内容的にはどうであつたらうか。まず、視覚表現語として使用され、植物、人物、衣・衣装などの色彩が美しく、はなやかで美麗な様子を示したものに用いられている。発展して、ある物が「にほふ」ことによってその効果が他のものにもまで映り合うというように、同じ視覚美の表現においても自由の動きをもった性質がうかがえる。又、視覚美におけるほのぼのとした全体的な漂う美しさの意から嗅覚表現語へと発展し、語義を広げてくる。それは衣装や懐紙などに焚きしめた空薫物のにおい、移り香のにおいというような平安朝人の嗜好と密接な関連をもっており、「かをる」の語義の域へ進出し共存するに至る。それから、視覚・嗅覚という感覚美だけでなくほんのりと五体に感じる、あるいは感じさせる美。社会的地位、権力を表わす語へと変化するほどの自由性をもってくる。上品な美を表わす「かをる」のように固定された美でなく、流動性をもった、自由奔放なといつてもいい過ぎではない感覚美の表現語として存している。又、その価値観はといえば、人間の最高美である魅力的な美から、顔をそむけるようなこげ臭い衣のにおいや草葉のにおいまで広範囲に渡っている。だが、

「にほふ」を使用している世界が、一般庶民の世界でなく、王朝貴族の世界であることからその価値の最低限も想像できよう。

第三章 結 論

「にほふ」の用法は、視覚的表現語、嗅覚的表現語、又視・嗅覚的表現以外の精神的・社会的な表現語ともうひとつ視覚表現と嗅覚表現の合流された視・嗅覚表現語と四つの意味に使用されている。

対象からみると、視覚表現語としては、人・衣装・植物などが美麗であることに使用され、衣装の場合は、特に襲の色目についての美が多い。

色彩的には、紅もしくはあかい色をさしたと考えられる。

「にほひやかなり」は視覚表現語としてのみ使用され、それに対象は人物の様子についての例が多い。

次に嗅覚表現語としては、視覚表現ほど広範囲にわたっていない。空薫物の香、人の移り香、植物の順に多く使用され、衣・衣装にたきしめた香のにおいという場合が専らである。

次に「かをる」との関連性からみると、「かをる」が上品なみやびやかな美という固定化された幅狭い義に使用されたのに比して、不快な美から人間の最高美に至るまで広範囲の義に使用されている。つまり、「にほふ」が「かをる」よりも広く人々の間に使用されているということ、価値観が「かをる」の場合は高い地位で狭く使用されているに比べ「にほふ」は「かをる」の価値観の域も含まれ、もっとも広く低い価値にまで及んでいたといえる。

変遷の状態からみると、万葉末期から平安初期にかけて視覚表現

語としての位置を確立し、中期に貴族社会の全盛期をむかえ、貴族の香ひ趣味などと関連して、「かをる」と共に、嗅覚表現語としてより広がりをもってくる。又、視覚表現においても単に情景が美しい場合のみでなく、襲の色目やばかしなどへと対象を広げている。さらに栄華・出世など社会的・精神的な美へと展開する。特に「源氏物語」の頃にその転期が顕著にみられる。後期に至ると、視覚・嗅覚美をかねそなえた語義が生まれる。

このように万葉期に生をうけ、視覚表現語として成長し、平安朝に至り、主に感覚美の表現語として広く自由性をもって存している。やはり、この時代における「にほふ」の語義及び変遷などは再度述べてきたが、香の嗜好などといわれる王朝人の生活感・社会感などと切り離せないものがあつたろうと思われる。

補 註

註1、一

註2、『源氏随放』昭和十九年再版発行所収「香ひの趣味」より

註3、『かをる』と「にほふ」考』平安文学研究第四輯、昭和二十四年七月発行より

註4、『匂ふ』匂ひやか』「花やか」考』平安文学研究第十五輯、昭和二十九年六月発行より

註5、『かをる』と「にほふ』』國語と國文学、昭和三十四年三月号より、

註6、『新訂、大言海』大槻文彦著。『大日本国語辞典』仁田万年他共著。『広辞苑』第二段。『新選古語辞典改訂新版』中田祝夫編『改訂新版古語辞典』、『新潮国語辞典』の六冊を特に利用した。